

《文献目録 B》

本 Databse は2項目構成になっている。

- 1: 人名（本当は「人名；著書名」にすべきもの。）
- 2: 裾分先生のコメント

1:Ackerman

2: レオナルドの絵画に関する書籍。8部からなる。構成について。

Lomazzo は重要。直接レオナルドとは関係ないが、メルティと会っている。画家であったが失明して出家した。レオナルドと同じく文筆に入る。いくつかの本が残っている。

レオナルドを知ろうとするならば Romazzo をひもとけばレオナルドのことが出てくる。

参照 Lomazzo P509 Lomazzo には 2 冊

レオナルドの周辺の芸術書

Alberty

Lomazzo

1:Amoretty

2: 17,8C の人。お坊さんである。アンブロジーアーナ、ミラノの教会に出入りした。かなり早期のものである。ヴァザーリを引いて、レオナルドの絵画論を編纂したが、そのスタイルは Vasari 的ではなく cool で客観的なレオナルド評価である。(1804) seeP510

1:Barocchi

2: ピサの高校の先生。ドイツ研究所で会った女性の Vasari 研究者。後世に残る仕事をした。

Vasari の初版と第二版との比較検証をした。

重要なことは素描概念の成立を指摘したこと。s41,42,44 *?*

単なる比較ではない。

私（裾分）は初版も第二版も手に入れました。すごい値段でした。初版は丸善の古書店でした。芸大の辻茂さんが抑えていたが、国庫予算の凍結された

状態だったので辻さんではなく私(裾分)のところに来た。第二版については、文流のリストに第二版があるではないか。早速電話をしてくれということになった。抑えることができた。初版と第二版との比較をした。このときに Barocchi の本が出た。第二版に「デッサン」が多い。これは「発見」であった。初版では「デッサン」は重要ではなかったが、第二版の頃には「デッサン」が重要なものになっていた。Vasari の中で「デッサン」はいかなる位置を占めるか。Vasari の手記の中に「ギベルティのデッサンが私のデッサン集の中にある。レオナルドしかり。」が見える。Vasari は真剣に当時の有名な画家たちのデッサンを収集した。その収集は Uffiti 美術館に入ったが、残念なことには Vasari の収集が他の Uffiti のコレクションの中に紛れ込んでしまったため、Uffiti 所蔵のデッサンコレクションから Vasari の収集したコレクションを区別することはできない。Uffiti のデッサンは少ないが、その Uffiti のデッサン集も出版されている(ラギアンティ、2Vol)。

1:Berenson

2: 日本の美術史の先輩たちはこの Berenson のおかげを受けている。イタリアルネサンスのフィレンツェ派の画家のデッサン集を著わした。大きい本である。イタリアのフィレンツェにベレンソン研究所がある。私(裾分)も何回か行きました。Berenson が所有していた蔵書群がそこにあります。児島喜久雄や八代もそこに行った。Berenson 自身はアメリカで生活した。

レオナルド研究には欠かせない研究所である。

1:Blut、Antony

2: イギリスの人。私(裾分)はロンドンで会った。Coutould Institute の所長をしていた。Alberty、Piero della Francheska、Leonardo などの Artistic theory を研究した。スパイ罪で学問から姿を消した。

1:Bodmer

2: ハイデンライヒ同様、レオナルドの厳密な検証をした。図版集。20 点のデッサン。

ある時期では、Bodmer が基準であった。

1:Briquet

2: 透かし模様の研究。日本では引用されていない。ブリケを使いこなせる段

階にきていない。早いものでは*?*

12,3C にヨーロッパで紙が使われるようになった。その紙がどこでいつ頃作られたが透かし模様や線の質で分かる。年代特定には不可欠の本。この本には1万5千もの例が列挙されていて、それらは手書きである。写真でないのが残念である。

レオナルド研究では20C 早期から「透かし」を論じる学者がいた。Pedretti はそれを取り上げてから重要な意味を持つようになった。「レオナルド素描集」(岩波)にはブリケ番号が入っている。ミケランジェロのデッサン集にもブリケ番号が引用されるようになった。ブリケ番号によって使用された紙が何年以降のものであることが分かる。

1:Calvi

2:レオナルドのマヌスクリプトを年代的に整理した。私(裾分)のレオナルド年代記もこの本を参考にした。

1:Caden

2:Vasari の伝記。自伝を第二版に載せている。それに則ってCaden が書いたもの。Vasari は旅行をしているが、その間のことを記した手紙が残っている。

1:Frey

2:Vasari はミケランジェロの伝記を書いている。Condivi もミケランジェロの伝記を書いた。Frey は比較してミケランジェロ伝を書いた。Vasari に関しても正確な年代記を作った。

1:Carlo peg?

2:Vasari の Raginti 版を作った。Vasari 研究には不可欠。Ufiti に残っている Vasari のものと思われるデッサンを集めて出版した。

4/21

1:Carusi

2:レオナルドの研究者としては目立たないが以下の本がある。

--Salla はレオナルドの「絵画論」は二つある。原本から取り出した省略版が

長く続いてきたが 18C に入ってレオナルドの「絵画論」オリジナルが出版されたが、これに関するカルーシの論考がある。省略本への意見を述べている。--Lettele は手紙を下にして総論を述べる。

1:Chastel

2:レオナルドの「絵画論」に関する著作がある。この方が重要。高階秀爾の先生。「絵画論」の 1/5 を仏語訳して出版した。ルードビツヒによって独語訳しているがこれは独の最初のマクマホン英訳よりも早い。仏訳もあったが、独訳後に仏語訳が出たが仏語訳は十分に使われることはなかった。ルードビツヒ、マクマホン、シヤステルという順番になる。seeP510 1651 年。伊語。省略本。

1:Cherubelli

2:ミケランジェロの文献録。3 冊。1942 年までしかない。重要文献である。

1:Clark

2:*?*

1:Clement*?*

2:ミケランジェロ研究者。手紙の中からミケランジェロの芸術観を見る。

1:Collebi

2:Vasari に初版と第二版とがある。初版には「デッサン」の語はない。パノフスキーによって指摘された。私(裾分)は研究した後で知った。方法は私(裾分)のものとは異なる。第二版に出ている「デッサン」を全て拾い上げた。Vasari のデッサンは Uffiti にあるデッサンと付き合わせた。それを 2 冊にまとめたのがこれ。

1:Corbeau

2:コルボーを知ったのはマドリッド手稿の発見と関係がある。スペインのマドリッドでレティ教授の友人がレティに *?*
レティはマドリッドに行き、レオナルドのものと確認してその後一挙に知られるところとなる。

Corbeau は予測を立てていた。レオナルドが亡くなってからレオーニがスペインに行って宮廷に仕える。メルティの家に行って息子が売り出してスペイン

に寄付して身分を得た。その記録を辿ってマドリッド手稿の2冊が（スペインにあることを）予測していた。アンはボアーズの彼の住居に寄った。未亡人からコルボーの論文を幾つか貰った。コルボーコレクション（仏カーン）にも行った。岩波の「図書」にも書いた。

1:D'Add

2: 実態の分からない書物である。リヒターにも出ているが訳の分からない書物である。アメリカで見つけた。

レオナルドの中にレオナルドが読んだと思われる書物を取り上げている。レオナルドの中に「～を読んだ」とあればどのダンテの第何版かと調べた。レオナルドの生きていた時期のダンテとは何か。そのテキストはどこにあるか。第何版のどこに所在地。1873年と最も早い時期。Solmiがそれを引き継ぐ。

1:Degenhart

2: ハイデンライヒの友人

1:Duhem

2: 仏人。私（裾分）にとって最も啓発された書物。『「レオナルドが読んだもの（書物）」と「彼を読んだもの（読者）」の論文がある。「レオナルドが読んだもの（書物）」としてアリストテレスをはじめとする種々の古典からダンテ「新曲」に至るまで実に多くの著作をレオナルドは読んでいて、レオナルドの素養の一端を窺うことができる。レオナルドのメモの一部分からその部分がどの本のどこの部分かを知ることができる。

(c.f Solmi → 500前後の本を集めた。この版を読んだに違いないと述べた)

私（裾分）は早い時期にこの本を読んだがSolmiは知っていた。Solmiは早い時期のものである（1907,1911年）

1:Dussler

2: 略

1:Eastlake

2: 西洋絵画史。絵画に用いられた材料の研究。レオナルドのフレスコはどのように描かれたかとい技術と材料に関する研究。

1:Eibner

2: これも材料に関する研究。

1:Einem

2: ミケランジェロの入門書

1:Emilian

2: ルネサンスの遠近法の問題を扱う。レオナルドの遠近法が如何に精密であるか。アルベルティ、ピエロデラフランチェスカよりもレオナルドの方がより厳密である。

1:Eshe

2: レオナルドの解剖学。解剖図を列挙している。すごい。

1:Fasola

2: 遠近法発展史。ユークリッドからピエロデラフランチェスカに至るまでの（レオナルドは入っていない）遠近法の人間の感覚的な（遠いものが小さく見える）ものを取り扱う。

1:Fantana

2: ダンテ「神曲」の注釈の歴史

1:Firpo

2: 略

Utopiaとは。自分が町を作るならばこのような町を作るだろう。町は川のそばに。その川には水草が茂りオルゴールが付けられている。自然の音楽が流れる。付け加えて、川の流れに水車だけではなく羽をつければ部屋に涼しい風が入ってくる。葡萄酒を浸けておけば冷やしたものが飲める。

1:Forster

2: ボローニャ大学（？）の解剖学の教授。Mar' Antonio に会っている。岩波の解説にマルカントニオの講義の図が載っている。Vasari の中に会ったことが書いてある。

- 1: Francastel
- 2: 科学史 略

1: Freud

2: レオナルドの「とびが口を打った」をフロイド流に解説。批判されて書き直した論文である。(1923) 1919 は全集にある。 see 岩波の「図書」に出ている。

男と女の sex 図 それをフロイトは心理学者だからレオナルドの sex 観を引き出した。しかし、フロイトが見たものはレオナルド自筆のものではなく他人の見取り図を見て論じた。そこに批判が集中した。

1: Frey

2: Vasari の (が *?*) 美術家伝を書こうとした。Vasari 以前の Vasari。コンディビのミケランジェロ伝と Vasari のミケランジェロ伝を比較する。マリア・ベッキアーノ (ベッキアーノは氏名不明という意味。つまり、マリアと呼ばれる某氏) という古文書がある。レオナルドの古文書に関する系図。誰が誰のことについてそれをどのようにして使用したか。Frey は古文書の発掘者である。

Vasari の 200 通の手紙の編纂をした。

1: Fuch

2: 略

1: Gantner

2: 私 (裾分) は Gantner と手紙のやり取りをした。レオナルドのヴィジョンについてが彼の代表的な仕事。ミケランジェロの最後の審判やその他の人の最後の審判 (ジョットー パルマ・アレーナ祭壇画)、レオナルドの最後の晩餐。最後の審判も書こうとしていたガントナーは言う。ミケランジェロが最後の審判を描いたが、場合によっては自分ならばこのように描くというアイデアは実らず、ローマ法王からミケランジェロに注文が行った。ガントナーはそのビジョンを残されたデッサンから導き出した。ガントナーがしなければ私がしたかったテーマである。単にデッサンだけではなく、2,3 行しか残されていないメモからでも拾い出している。最後の瞬間をレオナルドはどのように考えていたか。最後の審判というテーマよりも世界の終末と呼んだほうがよい。レオナルドの宗教観も含めて最後の審判というのはレオナルドにとっては世界の最後として捉えられ

た。

人は死ぬと 悪→地獄 善→天国

地獄でも天国でもないもの 中間は煉獄へ行く (ダンテ)。

イエスはある時期に現れて審判のやり直しをしてくれる。プラトンやアリストテレスも地獄に行っているが、もう一度審判をしなおす。新約の思想へ。レオナルドにとって、イエスが審判のやり直しをしてくれるということは意味のないことであった。キリスト教や神なしで生きていくレオナルドにとってはこの世界が一瞬にして壊滅してしまう最後の審判。Unter*?* der Velt。これは驚べき発想。ガントナーの目で見れば納得できるものがある。ミケランジェロの最後の審判とレオナルドの地球の天変地異の差。最後の審判はレオナルドにとってはこの世界の終末を意味する。レオナルドの中には神に関する信仰心に関するものがない。神という言葉の中にはには出てこない。Dio (神) を神として使う用法もあるが、レオナルドの Dio はキリスト教の Dio ではない。レオナルドの Dio は前後を読めば必然たらしめるもの、真理たらしめるもの。これをレオナルドは Dio という法則の原理を意味した。

ミケランジェロは手紙、メモ、*?*. 自分が彫刻家、画家、美術家であることが神の意思にそぐわないならばいつでもやめる。キリスト教の尼さんとプラトニックラブに陥っている。ローマ法王庁に出入りしている。新教的なものにもかぶれないまじめな信者である。ミケランジェロ自身は地の人が Divino Michelangelo 神のごときミケランジェロ。この神はキリスト教的な意味ではない。この世を越えたという意味。(時代は変わっている。神はキリスト教以外の観念を含むようになっていた。)

マドリッド手稿を見るためにスペインに行くときガントナーに手紙を出した。私(裾分)は見たい。紹介して欲しい。ガントナーは紹介してくれた。ガントナーにお礼の手紙を書いた。貴方と会ったら意見を交換したいとガントナーが言ってきた。私はすごいことだと思った。日取りが合わず結局は実現しなかった。

レオナルドは出来上がった形では最後の審判を残していないがメモやデッサンは残している。美術史は出来上がった作品の歴史ではなく、出来上がらないものも含めた歴史でなくてはならない。これは重要なことである。

Die *?* entdecken Man,

前形象を*?*したあと、マドリッド手稿が発見された。この手稿に関する論文が「新たに発見されたレオナルドのマンスクリプトと素描について」

1:Gauge?

2: 「手紙 15,16,17C の美術家の未公開の書簡集」 基礎的な資料である。

1: Gilbert

2: レオナルドの絵画論に関する書物の紹介（ルードビッヒ版が最も古いが）。
2 番目の P.McMahon（英訳）についての紹介したもの。

1: Glasser

2: 画家と注文主との契約書についての研究。基礎的文献である。

1: Gombrich

2: 美術館で偶然に会った。

1: Goldsheiden

2: レオナルドの図版集。一般向けの定番。カチッとしたもの。

1: Golzio

2: レオナルドとは直接関係ない。ラファエロに関するもの。

1: Gould

2: 特殊研究。山・川・風景の色についてのメモを集めたもの。

1: Guasti

2: 建築士。サンタマリア・デルフィオーレの建築史的に見た技術。丸屋根の石積の技術。バチカンのサンピエトロ。アルコのテクニカ (archtechure の語源)

1: Hartt

2: 研究者ではない。彫刻、図の出版をした。その人独特の発想はない。図像をよく引用させてもらった
入門書。

1: Heidenreich

2: 大変に世話になった。大きな影響を受けた。自然研究者の LDV と artist としての LDV の統合された人として LDV を捉えた。ミュンヘンに行ったとき教授 (*?*) であった。友人・先輩である Pedretti の仲人である。Pedretti も

Heidenreich を高く評価していたが、Pedretti は独語が苦手なのか Heidenreich をよく読んでいないように思われる。

一般に (*?*) 用いたのは二巻本のもの (1954)。芸術としての科学。後半は科学としての芸術。これの基をなすものは『芸術と科学』(1945) 三番目のものはマドリッド手稿が見つかったときのもの。彼もマドリッドに行っている。1968 の論文の後、70 年前後にマドリッドでマドリッド手稿を手にとって見た。このマドリッド手稿の発見のときから、世界はレオナルドの残したもう一つの遺産があることに気が付いた。この発見に刺激されてヨーロッパではレオナルドのマヌスクリプトの出版が相次いだ。厳密に読む傾向が生まれた。パリ手稿やアトランティコ手稿が再び見直された。第二次レオナルド手稿の出版・研究がスタートした。比類なき厳密さと正確さで述べられ、憶測でものを言わない。根拠の上で資料批判がしっかりとしている。レオナルドの絵画作品の数は研究者によってまちまちであるが、Heidenreich は 11 点とする。非常に少ないように思われるが、弟子などの作品と真作とを厳密に区別している。生きていたときの史料（言葉、literaryなもの、契約書の有無などからそれを探す。日時・内容の点検から材料を取り出してヴァザーリ以前のヴァザーリなどを調べる）を集めて判断の材料とする。デッサンや習作を調べて生きていた頃のもののみならず死後に語られていたことも調べた。厳密な critic をする。髪の子ジレなど。11 点以外は似て非なるものとした。この観点からすると、Pedretti は甘いといえる。レオナルドらしからぬ絵をレオナルドのものとしている (60 年 9 月)。方法と結論を導くものが甘い (月光荘事件)。Pedretti の知識は優れたものがあるが、それらの知識をどのように組み立て、どのように理解するかは又別問題である。

1:Hind

2:これは古い。1923 年。史料としては「オランダと北欧の美術家達のデッサン」のなかにレオナルドの影響を受けたものが入っている。

1:Holl

2:解剖学に関するもの

1: Istitute Geografico de Agostini

2: 大きな書物。機械工具を集めたもの。百科事典として用いた。

1:Istiute

2: ヴァザーリの美術家伝。ルネサンス研究に関心のある人が論文を書いた。

1:Jackschath

2:anatomy に関するもの。今日的な意義があるかどうか。

1:Jackschath

2: レオナルドとヴァザーリとの影響関係を述べたもの。

1:Jackschath

2: ピエロ デラ フランチェスカの遠近法に関する本をレオナルドが読んでいるであろうことが判る本である。

アルベルティ研究

共に遠近法を知るための重要な本。

1:Jasprs

2: 「哲学者としてのレオナルド」 レオナルドを論じるヤスパースは低い。

1:Kallah

2: ヴァザーリ研究には重要だが、レオナルド研究には略。

1:Keele

2: カリフォルニア大学医学部の教授。ペドレッティからよく聞いたが、会ったことはない。レオナルドの解剖に感銘を受けて一連の仕事をした。カリフォルニアの Elmerbelt library (私も何回か行った) をよく利用したらしい。ペドレッティの先輩にあたる。ペドレッティが正教授になるときに Keele と私とが推薦者となった。Keele の蔵書を Elmer に送呈した。 Keele とペドレッティとで解剖手稿を書いた。二人の共著である。

1:Klein

2: 解剖の研究。中世に関するもの。解剖学史。レオナルド研究の基本文献としては省く。この本は岩波から参考にしてくださいと頂いたものです。

1:Klein & Zeiner

2: 略

1:Koyre

2:「科学史におけるレオナルド」レオナルドの科学史に研究には必須の文献。下村寅太郎教授が高く評価していた。

1:Krautheimer

2: 大きい本である。ギベルティ研究には最も重要なもの。i commentarii は頭にあることをまとめたという意。備忘録。引用させてもらった。彫刻家と美術家。マヌスクリプトを残している。レオナルドが読んだ。この中に15Cの女性(*?*)彫刻家。イタリアルネサンスの足跡。先人の足跡が美術史。ヴァザーリも読んだ。ヴァザーリは三つの時代に分けた。ギベルティには時代区分の概念はない。先輩の業績を書き留めている。イタリアルネサンスの.....*?*。チェンニーニの絵画の技法。ギベルティ、アルベルティ絵画論と彫刻論。ピエロデラフランチェスコ絵画の遠近法。遠近法はレオナルドやヴァザーリが続く。

1:Kurz

2: テーマが悪かった。ヴァザーリが美術家伝を書いている。1550年(初版)、1568年(第二版)。美術の歴史で初めて。出版され、かつ、第二版が出ることは初めて。これは大変なことである。内容に手をいれて訂正して補筆して分量も二倍ほどになった。どこをどのように訂正して補筆したかは重要である。

「ヴァザーリのデッサンについての書物」

デッサンという言葉は初版にはない。二つの分野について分ける。一つは二版になって初めてレオナルド、ミケランジェロ、ピエロデラフランチェスコのデッサンを言い出すのである。もう一つはレオナルドなどのデッサンを自分の座右に置いていると言っている。デッサンを論じると同時に収集をしていた。ヴァザーリが身近に置いていた収集物とデッサンの概念について論じること。

絵画、彫刻、建築について(二版の最初のに)この三つの分野はばらばらではなく一つの美術として統一されたものを掴む必要がある。その統合するものは素描。母なる素描。三人の子供(美術、彫刻、建築)の母である。

美術史の上でここから大きく変化していくことになる。素描概念の完成。売買の対象としてのデッサン。展覧会で鑑賞の対象となる素描。ピエロデラフラ

ンチェスコやギベルティ、ジョットー、マサッチョには素描は残っていない。(カルトン (カルトーネは実物大) とは違う素描。 デイゼーニョからデザイン。意味が変化した。)

1:Kusenberg から

2:Lisner に至るまで略

1:Maccagni

2: 私を Jenova 大学に呼んでくれた。「フィレンツェの秋」に寄稿してくれた。中世のメカニズムを取り扱ったもの。彼は 1932 年生まれである。(私は 1924 年生まれ) 科学技術史の正教授である。新潟のレオナルド博物館の構想が起こされたときドーニ (マッカーニよりも 8 歳若い) と共に、お願いしたいきさつがある。 マドリッド手稿 (2Vol.) の P2-3 にレオナルドが持っていた書物のリストが出てくるがその考察。リストの中の一冊づつに考証をしている。

1:MacCurdy

2: 早い時期の英訳。レオナルド研究に大きく貢献した。リヒター (独) とこの二人が著名。リヒターは原文を引用して英訳をつけた。MacCurdy が文学的であるに対して、リヒターの方が、学問的である。同じ個所を比べてみるとリヒターは訳のみならずコメントも入れている。

二人とも膨大なレオナルドのマヌスクリプトを扱っている点で高く評価しなくてはならない。扱い方に二人の差を見出す。MacCurdy は詩人的である。美学学会に書評を書いた。岩波文庫の「レオナルドの手記」杉浦明平は引用として MacCurdy を挙げていないが、これから翻訳していることが分かる。

1:Maltese

2: ローマ大学の教授。

1:Marinoni

2: 会った。私の講演を聴きにきてくれた。大事な本である。古浦敏生 (広大) がこれで論文を書いてくれた。レオナルドのマヌスクリプトを見てみるとラテン語の変化表が出てくる。レオナルドはラテン語を勉強したふしがある。このラテン語を学んだときの教科書とした本をマリノーニは探し当てた。レオナルドがラテン語を読めたかどうか。レオナルドは高度なものとはともかく、初歩的なラテ

ン語が読めた。

トーニの紹介でブレスシアでレオナルド学会があったとき講演した。「レオナルドの絵画とマヌスクリプトの関係」を聴いてもらって、あとでワインで談義した。

マッカートニー、トーニ、マリノーニは仲間同士。ペドレッティは入ってこなかった。

1:MacMurrich

2: 解剖学

1:Moller

2: 偉大な研究者である。一番の仕事は ...(*?*)。 ペドレッティも Moller を用いている。ペドレッティのどの本であったか Moller に捧げるとある。レオナルドの解剖手稿はマヌスクリプトの所々を切り取られたところがある。その断片はアトランティコと親子の関係にあることを見出した。レオーニが切り取ったのである。ウィンザーの断片は元はアトランティコ手稿にあったものである。これを継承したのがペドレッティである。透かし模様を合わせて検証した。(abbozzi *?*) これは今世紀最大の成果といってよい。

1:O'Malley

2: 解剖学。

1:Panofsky

2: ヴァザーリ序文は初版にはなく、第二版において初めて付けた。本文も変わった。絵画、彫刻、建築の三分野。三つの序文を書いた。複数のものを統合した。統合するものはデッサンであった。ヴァザーリにおけるデッサンの概念。これまではルネサンス初期ジョットーやマサッチョらはカルトーネといって壁に貼り付けてフレスコを描く。その後にカルトーネは捨てられた。今日残っているのは、ウフィチに残っているもののみである。レオナルド、ミケランジェロになるとデッサンはそれ自体が美術であり鑑賞の対象となった。ミケランジェロのデッサンは700-800枚ほどが残っている。

イタリア・ルネサンスにおける素描概念の成立。三分野の統合されたもの。基礎的段階のもの。デッサンはイタリアではディゼーニョと呼ばれているものがフランスではデッサンと呼ばれ、イギリスではデザインとなった。ヴァザーリでは三分野が含まれている。イギリスではドローイングの語が使用された。

これらのことをパノフスキーが言った。ヴァザーリの第二版において初めてデッサン概念が成立したことを指摘した。「単数のルネサンスと複数のルネサンス」という本を著した。これは重要な本である。

ホイヘンスはレオナルドには会っていない。ホイヘンスはレオナルドの死後メルティに会いに行ったが、メルティには会っていない。ヴァザーリはホイヘンスに会っている。ホイヘンスがしていたことは何かをパノフスキーは書いている。

1: Papini

2: ミケランジェロに研究には重要な本。ヴァザーリの「Vita」をPapiniが出版した。

1: Parronchi

2: ペドレッティを介して会った。世話になった。ペドレッティがフィレンツェに来たとき私とペドレッティと三人で食事をした。専門はルネサンス。

1: Parthey

2: レオナルドのマヌスクリプトがスペインに渡った。英王子は妃ではなくレオナルドのマヌスクリプトを持ってイギリスに帰ったと言われた。ウィンザーに入ってからある人が出版した。オリジナルをデッサンしたものであるが、似て非なるもの。この本は珍本奇本の類である。

ポパム、ハイデンライヒ、ボードマー、ベントウーリ
児島喜久男、下村寅太郎

1: Popham

2: 書物の他に論文あり。新しいレオナルドの素描を紹介した。「Drawings...」レオナルドの主要なものを集めた。デイゼーニョには素描と素画を区別する概念はない。Pophamもレオナルドのデッサンに関する時代とテーマに分けて解説したもの。

1: Reitler

2: 解剖の本

1:Reti

2: マドリッド手稿の発見のとき、その出版、解説、整理、執筆など大きい役割を果たした。この独語の本「再発見された」 マドリッド図書館の言い分は発見ではないというもの。 Reti はアメリカの大学にいた。Reti のほうが有名であった。Reti にお呼びがかかった。

1:Ricco

2:Scrittore: 執筆者。文筆家ヴァザーリ。ヴァザーリの絵画作品を見て回ったが、立派なものはない。画家ヴァザーリの本があるがミケランジェロの弟子としては二流、三流の画家であった。しかし、人物伝は実に見事なものである。ヴァザーリの美術史の中に意味を持つならばそれは「le Vite」によるであろう。Ricco はそれを正しく書いている。「le Vite」の初版について書いている。ヴァザーリは生きている間に第二版を出した。初版と第二版の間にヴァザーリの中に何が起こったか。初版と第二版との比較の中にルネサンスの謎解きが隠されている。この点に Ricco は触れていない。バロッキはこの初版と第二版を比較したが、比較の意味考察が欠けている。

1:Richter

2: 私にとって Richter は最初の門であった。この本にはお世話になった。私の研究室にこの二冊が置いてあった。レオナルド研究にとって第1級の功績である。McCurdy は少し劣る。Richter は何故立派か？ Richter はドイツ人だが伊語と並べて英訳をしている。同じ伊語を Richter と McCurdy は異なっていた。McCurdy は詩人であったため、ややこしいところは訳し飛ばしているところがある。正確な訳ではない。初版のリプリント版が出ている。第二版は娘の Irma が関係している。パラゴネが加わる。父としては反対であったろう。レオナルドの書いたものを入れるのであって、写本とかは入れないのが本旨であったから。絵画論の序文を全部 (*?*) 入れた。Irma はレオナルドを含む古文書を扱う。「レオナルドのパラゴネ」という本がある。

1:Rud

2: よい本である。ヴァザーリが西洋美術史において重要であるという論旨。西洋美術史はヴァザーリにおいて始まる。ヴァザーリは西洋美術史の父である。

1:Santillana

2: 下村寅太郎教授に紹介された。

***** (*?*)

レオナルドが読まなかったもの。

ベルトラーミ

レオナルドが当然読んでなくてはいけないが読んでないもの。読んだものがどのように影を落としているか。レオナルドの書物を漁る様子。

Calvi、Solmi、Bertorami レオナルドが読んだもの。

Solmi の本は 30 年前に再版された。翻訳。例えば、パチオーリ「神聖比例論」をレオナルドが読んだ事を示した。

レオナルドの知識の源泉。今世紀最大の功績は Solmi であろう。

1:Scaglia

2: レオナルドの機械工具のメカニズムについて。レオナルドの自然力利用についてまとめたいと思う。これは私のテーマである。Scaglia を入れて三人が ...、その他は ...(*?*)。レオナルドの機械部品、elements は 30 種類位ある。レオナルドの見識は今日にも十分に通じる。「知られざるレオナルド」を見よ。

1:Scheidig

2:Bossi。最後の ...(*?*) に関しては一番古い研究書。ゲーテの発言、Bossi の意見(*?*)。

1:Schlosser

2: 私にとって第 1 級の本。美術史は描かれたものの歴史として考えられてきたが、深めて学問研究精神史となるためにはその作家が描いた作品の評価だけではなく、その絵画製作にあたった schriften 精神を追求すべきである。美術史のもう一つの角度が必要。作品だけではなく、その作家が残した文章も重要である。フランチェスカ、アルベルティ、ブリューゲル、レンブラント等も研究されている。

Schlosser を頼りに資料を集めました。ものすごい学者がいるものだと思います。目的とする人物であった。

美術家は描くのみならず、文章も書き残した。美術家の立場で書いてある。私も Schlosser の跡を辿って可能な限り集めた。学問の応報論の基礎がこの Schlosser を通して固まった。レオナルドの書いたものに注目することの意味を教えられた。この literal な側面を欠いた美術史は片手落ちである。Schlosser の本は研究室にあった。Richter にも出てきた(*?*)。原書を読む演習ではよく Schlosser ともう一人ウィーン学派の ...(*?*) が出てきた。「形態だけではなく、もう一つのもの、literal なものも忘れてはいけない」

私はアルベルティ、フランチェスカ、ギベルティ、レオナルドに関する全てのファクシミリを収集した。

1:Sergescu

2: 科学史からレオナルドを見ようとする人たちの論文集。その中に、この人が論文を書いている。レオナルドと数学。レオナルドの算数は間違っている。数学に関しては大きな業績、知識は認められない。

1:Siebzeiner-Vivanti

2: ダンテの神曲。イタリア語の勉強に使用した。この人による辞書。人名・地名。ダンテにおいてすら arte は種々に用いられている。岩波文庫の「ダンテ」がある。それより古い翻訳がある（文語体）。私はその文語体の「ダンテ」とイタリア語の「ダンテ」を併せを讀んでいた。伊和辞典がないので伊英辞典を用いて私なりに翻訳していった。分からぬところは山川平三郎（岩波文庫「ダンテ」）ではないもう一人の中山昌樹について図書館の月刊誌に書いた。初版は買い損ねた。第二版はボッティチェリの挿絵が入っている。挿絵を集めた本がある。アルノ川、兄貴、私がある(*?*)。

「我々が扱う学問は一方ではその画家が扱う芸術作品と片方は作家のリテラルな遺産がある場合が多い。そう言う作家に関しては単に美術作品だけではなくリテラルな遺産を含めた精神内容を考察することによって学問としての十分な体制整えることができよう」

例を挙げてみると、～は～という作品を残している。片方にはリテラルな文章がある。彼の描いた作品についてリテラルなことを残している。人に接する

にはどのような心構えが必要かを精神的なものを告白している。リテラルなもの併せて理解することによってより深く理解することができる。」

1:Solmi

2: レオナルドのマヌスクリプトに関する研究では第一人者。マヌスクリプトの中にレオナルドが読んだもの、アリストテレス、ダンテを引用しているが、ではアリストテレスのどの本を読んだのかを調べた。レオナルドが書き写したのはどの写本かを調べた。ギリシア・ローマ・中世・ルネサンスの著述家の名と引用部分をレオナルドのものにつき合わせた。引用間違いまでもが分かるようにした。レオナルドのもう一つの遺産を読み解くには Solmi は不可欠な人。三冊全体が一つの輪になる。

1:Steinitz

2: 女性研究者。フィレンツェ(*?*)。アメリカのエルマベルトライブラリーの...(*?*)。ユダヤ人。レオナルドの「絵画論」の写本とかの調査書としては....(*?*)で十分。レニングラードの図書館の絵画論の写本を見に行つたとき、来館者名簿名簿の中に彼女のサインが有ったのには驚いた。

1:Suida

2: 整理が行き届いている。「レオナルドと弟子? (*?*)」

1:Tolnay

2: ミケランジェロ研究の第一人者。Michelangelo(5vols)の内容はミケランジェロの手紙に関するもの。

1:Tolnay

2:Corpus

1:Toni

2: パチオーリとレオナルドとの関係。レオナルドのメカニカルな工作機械。Nandoとの計画は今、町田で進んでいる。これが実現すれば、Jobanni Toniを呼びたい。

1:Trachtenberg

2: 「ジョットーの塔」で世話になった。

1: Uzielli

2: レオナルドの手稿を忠実に扱っている。

1: Uccelli

2: レオナルドのメカニズムの研究

1: Valery

2: 有名な人であるが、研究書というよりは評論である。

1: Venturi

2: 「レオナルドとその門下」

「レオナルドの素描集」

1: Verga

2: 文献目録。これはものすごい文献目録。2冊本。1930年までの文献を出版年代順に整理した。私のファクシミリはこの本を参考に収集した。2900冊。これ以降は10年位前に3冊本のbiblioが出た。

Part I

A) 絵画論

I 絵画論

1651 絵画論 同じ年に伊・仏版が出る。1923年までが収録されている。中でも1817のものが重要。それまでは省略本。1817は1/3以上が省略されていたものを復元した。この1817は完全版である。これ以降は完全版が出版されるようになった。1882(独)はバチカンの許可を得て出版された最初(*?*)のファクシミリ。

II レオナルドの出版物

ほとんどがファクシミリ。私の収集のガイドとなった。

B) 省略本

リヒター、マッカーディはこれに入る。

Part II

レオナルドに関する著述出版物。 Scretti on L.D.V.

1:White

2: 平面の空間表現が生まれた。アルベルティ、マサッチョ、ボッティチェリ、ジョットの空間表現の不充分（しかし、BIRTH）を訂正したピエロデラフランチェスコ（線的遠近法）とレオナルドが rebirth させて正確になった。

周辺のことから。空気遠近法（遠くのもののはぼける）。